

有機栽培下における二番茶の病虫害被害と収量					
[要約] 有機栽培下において、「さやまみどり」「めいりよく」「おくみどり」「さやまかおり」「りょうふう」の5品種は供試品種の中で、病虫害の被害が少なく、生葉収量への影響が小さい。					
佐賀県茶業試験場・茶樹研究担当				連絡先	0954-42-0066
部会名	茶業専門部会	専 門	病虫害	対 象	茶

[背景・ねらい]

食の安全・安心への関心が高まる中で、生産現場では特別栽培や有機 JAS 等の生産方式が導入されているが、特に有機 JAS 栽培の場合、茶芽の生育を大きく左右する病虫害の対策は、耕種・物理・生物的防除が基本で、適用登録薬剤の使用にあたっては、重大な損害が生じる危険が緊迫している場合等の制限があるため、一般的な慣行栽培と比較した場合、病虫害によるリスクが高く、生産性への影響が極めて大きいと考えられる。

そこで、耕種的な病虫害対策として、有機 JAS 栽培適応性の高い品種の検討を行う。

[成果の内容・特徴]

1. 萌芽～伸育期にかけて、病虫害加害の影響が大きい二番茶有機栽培「さやまみどり」の収量は、慣行栽培と比較して減収が無く安定している（図1）。
2. 「さやまみどり」「めいりよく」「おくみどり」「さやまかおり」「りょうふう」「ゆたかみどり」の6品種は、現在普及率の高い「やぶきた」と比較して平均収量も多く、年次変動も比較的小さい（図1）。
3. 二番茶収量と病虫害による二番茶被害芽率について全供試品種の平均値を基準とした場合、「めいりよく」「さやまかおり」「おくみどり」「さやまみどり」「りょうふう」の5品種は、被害芽率は低く、収量が多い傾向にある（図2）。
同一栽培環境においても品種間で病虫害による加害程度は異なり、茶芽生育にも顕著な較差が見られる（図2 写真1,2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 病虫害への耕種的対策として、有機 JAS 栽培をはじめ、特別栽培、エコファーマーに向く導入品種選定の参考となる。
2. 供試園の耕種概要は、慣行管理を行っている品種茶園を 2008 年春から供試し、佐茶試慣行栽培区及び有機栽培区を設置、施肥は各区共通で菜種油粕を中心に(N:50 kg/10a/年)施用。

表1 供試品種

No.	品 種 名	No.	品 種 名	No.	品 種 名	No.	品 種 名
1	さえみどり	8	みねかおり	15	ゆめわかば	22	おおいわせ
2	しゅんめい	9	べにふうき	16	くりたわせ	23	めいりよく
3	さきみどり	10	みなみさやか	17	まきのはらわせ	24	やぶきた
4	そうふう	11	むさしかおり	18	するがわせ	25	おくゆたか
5	みなみかおり	12	はるみどり	19	ゆたかみどり	26	おくみどり
6	ふくみどり	13	りょうふう	20	あさつゆ	27	さやまみどり
7	ふうしゅん	14	みやまかおり	21	さやまかおり	28	さみどり

3. 病虫害被害芽率は、二番茶摘採時の枠摘芽を用いて、カンザワハダニ、ツマグロアオカスミカメ、コミカンアブラムシ、チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノホソガ、炭疽病等を対象に寄生或いは加害、発病の有無を調査算出した。

[具体的データ]

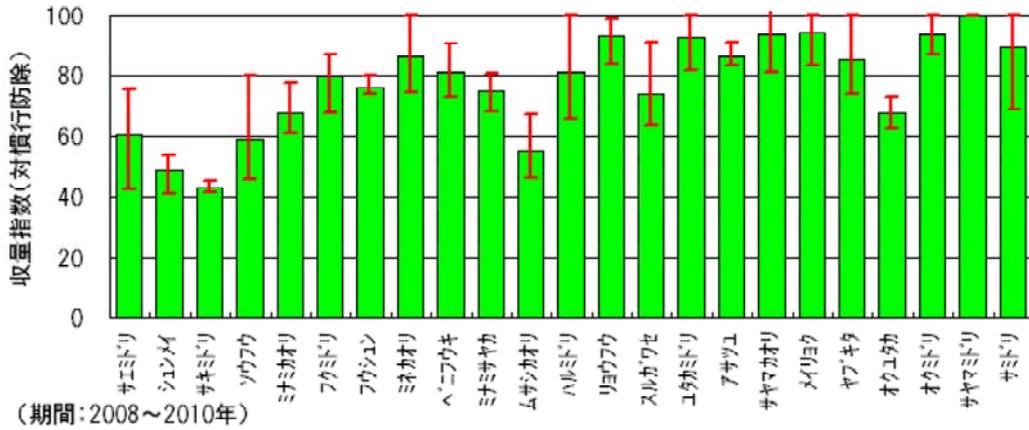
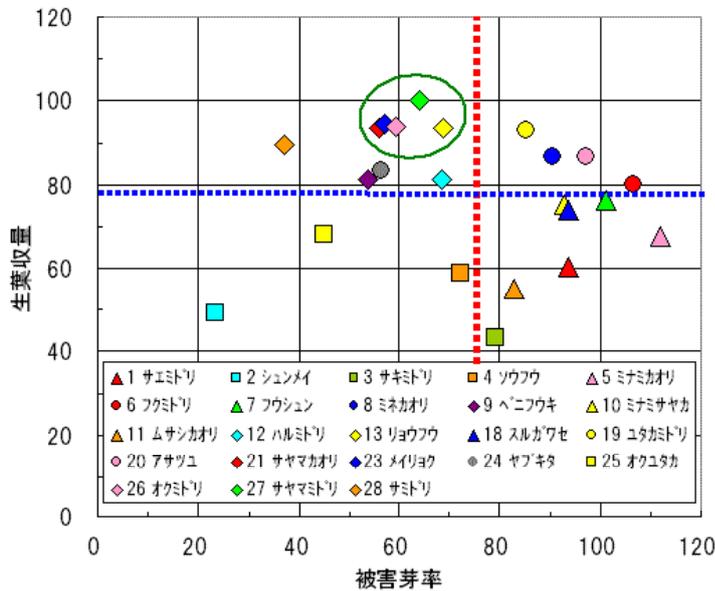


図1 有機栽培区における二番茶平均収量指数(対慣行栽培比)



注 1) 生葉収量は(有機区の収量／慣行区の収量)×100の平均

注 2) 被害芽率は(有機区総被害芽率－慣行区総被害芽率)の平均

注 3) 基準線は平均生葉収量(青)及び平均被害芽率(赤)を示す

図2 品種別の生葉収量と病害虫被害芽率の関係(2008～2010年の平均値)



写真1 さきみどり二番茶芽生育状況
注) 左: 慣行栽培 右: 有機栽培



写真2 めいりよく二番茶芽生育状況
注) 左: 慣行栽培 右: 有機栽培

[その他]

研究課題名: 茶園における既存有機栽培技術の検証と病害虫被害軽減技術の検討

予算区分: 県単

研究期間: 2008～2010年度

研究担当者: 釘本和仁、東島敏彦、山口史子、中村典義、徳重憲治

発表論文等: 平成20～22試験成績概要書